



だんぢょん攻略

# 中級コース

セーラーMoonRPG⑦

だんちよん攻略中級コース

深森薫

かつてこの世界は、神々の子孫と言われる偉大な魔術師たちによって支配されていたという。

『古代魔法王国』——絶大な力を持つ『魔法王』が代々支配し、有能な魔術師たちが宰相として治めていた国。より強い魔力を持つ者がより高い地位へと上り詰め、魔力を持たぬ者は蛮族と蔑まれた、魔法が全てを左右した時代。古代語魔法、精霊魔法、神聖魔法と呼ばれる3つの魔法体系は華やかな文化を創り上げ、都市を空に浮かべ、巨大なドラゴンたちをも下僕として使ったという。しかし、栄華を誇った魔法王国は、皮肉にもその発展を支えた魔力の暴走によって滅亡することとなる。

そしてその後、世界を支配したのは、かつて奴隷として虐げられ、蛮族と蔑まれた者達だった。以来数百年、魔法の力を持たぬ代わり強靱な生命力に満ちあふれていた彼らは、世界中に広がり、村を作り、街を築き、幾つもの都市国家を造り上げた。今も魔法の力は存在するものの、高度な呪文は失われ、遺された僅かな呪文も、操ることの出来る者はほんの一握りに過ぎない。大多数の人々は、田畑を耕し、獣を狩り、魚を捕り、ものを作り、ものを売り、日々の暮らしを営んでいる。

しかし、そのような普通の営みの、外に生きる道を見出す者もいる。いわゆる、『冒険者』と呼ばれる種類の人々である。

町や村から一步踏み出せば、そこは魑魅魍魎の闊歩する未開の地。そこに棲まう妖魔幻獣の類は、大抵が人間にとって危険なものばかりである。また、人を襲うのは化け物ばかりではない。山賊、盗賊、追剥ぎといったならず者たちも、悲しいかないつの世にも存在するものである。善良な一般人々がこれらに直面し、助けを必要とするとき。その時こそ、これらと戦う力を備えた『冒険者』たちの出番なのである。

また、大陸の各地には、かつて栄華を誇った魔法王国時代の名残が遺跡となって残されており、金銀宝石や、高度な魔法文明の遺物が眠っていることも少なくない。『冒険者』たちはまた、それらの宝を求めて各地を歩く旅人でもあるのだ。

しかし何より、冒険者達が愛して止まないのは、その自由である。社会の枠組にも、上下の秩序にも囚われないでいられる自由。たとえ相手が王様でも乞食でも、ひとりの人間として向き合えること。それこそが、彼らを常に危険と隣り合わせの暮らしに繋ぎ止めている理由なのかもしれない。

そして、酒場には今日も、旅から旅の暮らしの中でひとときの安らぎを求める自由人たちの姿があった――

街道沿いの小さな村の、一軒しかない小さな宿屋兼食堂兼酒場。

「マスターっ。エールとパンのおかわりねっ!」

「あっ。あたしもエールおかわりっ!それから、イノシシの骨付きカルビとヒレカツとモモ照り焼き、追加ねっ!」

今日も今日とて競り合うように追加注文合戦を繰り返す冒険者二人。食い道楽の盗賊、ヴィーナスト、胃袋にブラックホールを持つ戦士、ジュピター。

「よく食べるわねえ」

その様子を眺めつつ呆れたように溜息をつくの、マーズ。頬杖をつく彼女の指に光る銀の指輪は魔術師が魔法を発動させるために用いるものだ、その筋の人間ならば分かるだろう。

「んなにイノシシばっか食べてたら、今にイノシシになるわよ」

「ああ。大丈夫、心配ないって」

イノシシのリブをむぐむぐと囓りながら、ジュピター。

「あたしがイノシシになるより、マーズの血が葡萄酒になっちゃう方が先だろ。人のことより自分の心配しなよ」

「……悪かったわね」

無然とするマーズの前のタンブラーの、中身は今日もやっぱり赤葡萄酒。

「あらあら、いい食べっぷりだねえ」

恰幅のいい女性が、上機嫌で追加の料理を運んできた。

「それだけ食べてくれりゃ、こっちも気持ちがいいってもんだよ」

ジューシイなシシ肉がてんこ盛りの皿と、パンをてんこ盛りにした籠、エールを満たしたジョッキがどかどかとテーブルに置かれてゆく。

「ええ。皆、こんなに美味しいものをいただくのは久々ですから」

そう言って、くすくすと笑いながら、マーズが珍しくジュピターに言い負かされる様子を愉快そうに眺めているのはマーキュリー。ラベンダー・グレーの法衣の胸に、きらりと光るは智神ラーダの聖印である。

「そうかい？ そう言ってくれると嬉しいねえ」

「このパンも、女将さんが？」

運ばれて来たばかりだというのに、早くもあと一個になってしまったパンを、マーキュリーは手にとった。

「そうだよ？」

「そうですね。美味しいです、とても。パンなんてどれでも一緒だと思っていましたけれど、違うんですね」

「おやまあ。司祭さまは口が上手だねえ」

「そう言いながら、まんざらでもなさそうにころころと笑う女将。」

「いいえ。本当のことですよ。あ、女将さん、私にも葡萄酒を」

「あら。珍しいわね、マーキュリーがお代わりするなんて」

骨つきカルビを両手に持って、ヴィーナスが目をしばたかせる。

「ええ。ヴィーナスもどう？ そこの店ではちょっと頂けないくらい美味しいわよ。ねえ、マーズ？」

ちびちびと葡萄酒を口に運んでいたマーズは、何で私に振るのよ、というように一瞥して、

「……そうね」

ぶっきらぼうに答えた。

「あ、ほんとだ。おいしい♡」

その隣でヴィーナスが、タンブラーを手に舌なめずりをしている。

ぼごげっ！

「勝手に人のコップに口つけんじゃないわよっ！」

そのヴィーナスの後頭部に鉄拳を叩き込んで、マーズはタンブラーをもぎ取った。

「つたく、油断も隙もあつたもんじゃないわ」

「むふふ。間接キス♡」

ごっ！

ヴィーナスの額にマーズ渾身の肘鉄が炸裂。ヴィーナス、指先を唇に当てたままの姿勢で床に轟沈す。

「おや。あんたら、この葡萄酒の味がわかるかね？」

彼女たちのやりとりを聞きつけて、気の良さそうな店主が、これまたご機嫌でカウンターの向こうから顔をのぞかせる。

「ええ。うちの連れも、大事そうにちびちびい戴いてますし」

にこやかに答えるマーキュリーがちらりと一瞥すると、マーズはタンブラー片手にぶいと横を向いた。

「美味しいお酒を戴くときはいつもあぁなんです」

「うちで作った葡萄酒だよ」

店主は嬉しげに相好を崩した。

「そうですか、どおりで。……ところで。このあたりに、遺跡か何かがある、というような話はない

ですか？」

二杯目の葡萄酒を運んできた女将に会釈をしつつ、マーキュリーが尋ねる。

「遺跡？ さあ、ねえ」

うーん、と考えて、女将。

「なにせ、何にもない村だからね、あんたら冒険者が喜びそうな物なんて、それこそ葡萄酒くらいなものだよ？」

「そうですか。いえ、美味しいお酒に出会えただけでも十分ですが」

マーキュリーはさしてがっかりした風でもなく頷いた。ただそういうものがあれば儲け物だ、というだけで、最初から特に期待していたわけではない。

「あー、そうだなあ。あんたらの思ってるような物かどうかは知らねえが」

ふと思いついたように、店主が口を開く。

「北の森の中に、古いほこらみたいなものがあるって。そういえば聞いたことがあったかな」

「ほこら、ですか」

「いや、本当になにか祀られてるのかどうかもよく分からんがね。わしが直に見たわけじゃなし」  
店主は肩をすくめた。

「ただ、この村の猟師が昔、そんなもんを見たって言ってたような気がするな」

「ほこら、ねえ……それって、遺跡かな？」

いつの間にか復活したヴィーナスが、期待に顔を輝かせる。



さあね、と頬杖をついたまま、マーズ。

「ただ、少なくとも、今の時代の人間なら森の中にほこらなんて建てないわね、普通」

「それは、どの辺りですか？」

「さあなあ、わしは森に入ったことがねえからな。わしだけじゃねえ、村の者だって、森の中に入ったことがあるのは猟師か木こりか、よっぽど無鉄砲なガキくらいなもんだ。それでも、森のあまり奥まで行くことは滅多にねえそうだが」

鬱蒼として気味の悪いところだよ、と、店主は顎髭を撫でながら付け加えた。

「そのほこら、私たちが行って調べても構わないものではないでしょうか？」

「おお。別に誰の物ってわけでもねえし、構わんと思うが」

「大丈夫かい？ 森の奥にゃ、猛獣や化け物だって出るだろうに」

心配そうに、女将。

マーキュリーはにっこりと笑ってええ、と答えた。

「化け物退治には、慣れていきますから」

「マスター、カルビもう一皿ちょうだいっ！」

ジュピターの大声が、話の流れを思いっきり中断。

机に突っ伏すマーズ、肩をすくめて苦笑するヴィーナス、微笑で聞き流すマーキュリー。

「あんたねえっ！ 人が大事な話してるときにっ！」

「では、その猟師さんにお話を伺いたいで……その方のお名前はなんと仰るのですか？」

マーズの怒鳴る声も聞き流しつつ、マーキュリーが尋ねる。冒険者たるもの、やはりこれくらい沈着冷静でなくてはいけない。

「おお。マッカーフィ、つつつて、村の北の外れの家がそうだよ。お名前、なんてお上品な柄じゃねえがな」

店主はそう言っつて、からからと笑った。

\*

翌日。

がさがさがさっ

一行は、森の中を歩いていた。

べきっ

みしみしっ

例によってジュピターが、斧を片手に道を作りながら進んでゆく。森は奥深くに分け入るにつれて密度を増し、密集した枝が顔にちくちくと刺さり、倒木が行く手を阻み、深く積もった落ち葉が足をつぶずぶと沈ませて歩きにくさを増している。

「ほんとに、獣道しかないんでやんの」

その獣道も、道と呼ぶのはおこがましいくらいのもので。

「このあたりは村の人も来ない、って仰ってたしね」

少だけ歩きやすくなったその後ろに、マーキュリーが続く。その手には鋤杖がしっかりと握られている。

「例のほこら、」

髪に引っかかる木の枝を払いのけながら、マーズが言う。

「遺跡だったらいいけど。わざわざこんなところまで来て、本当にただのほこらだったら腹立つわね……ああ鬱陶しい！」

取っても取っても髪に絡まる枝を苛立たしげに引っ張るマーズ。

「んな長い髪、そのまんまにしてるからだ」

ばさばさと斧を振るいながら、ジュピター。

「髪、結んだら。少しは違うんじゃないかしら？」

いつものヒステリーに、マーキュリーが苦笑する。

「はい、マーズ。よかったら使って。」

後ろから差し伸べられたヴィーナスの手には、細い赤のリボン。

「お・そ・ろ・い♡」

「……………」

無然としていたマーズだったが、やがてそのリボンを手にとると、泫々と腰まで届く黒髪を束ねて結んだ。

「おっ。これじゃないか？」

不意に、明るい声音でジュピターが言った。樹木が途切れ、少し開けた場所に出たようである。そして、その中央に緑色の塊がそびえ立つ。不自然に四角い形と、蔓と蔓の隙間からかろうじて覗く石組みが、それが人工の建造物であることを示していた。

「お宝お宝っ。さて。じゃ、まず入り口を――」

捜しましょう、と言いかけてふとヴィーナスの足が止まる。

「どうしたの？」

「ん……今、動いた気がする。そのの、蔓」

「風でも吹いたんじゃないのか？」

肩をすくめるジュピター。用心するよりも、トラブルが起こってから対処するタイプである。

「いいえ。風、じゃないと思うわ」

じっと目を凝らしていたマーキュリーが言った。

「すっかり紛れてるけど。あの辺の蔓、キラール・クラーパーだわ」

キラール・クラーパー――植物モンスターの一種である。自在に動く蔓で近づく生き物を絞め殺し、その死体を自分の養分にする『殺人ツタ』。

「そう。じゃ、とつと片づけましょ。ジュピター、松明点けて」

少し乱れた髪を整え、束ね直しながら、面倒くさそうにマーズが言った。ジュピターは、人使いの荒い奴だ、などとブツブツ言いながら松明の用意をする。

松明に火が灯ったのを見て、マーズは呪文の詠唱を始めた。韻律に合わせて、彼女の右手が複雑な動きで空気をかき回す。

そして。

「『炎の矢』<sup>ファイア・ボルト</sup>！」

彼女の『力あることば』に、ジュピターの持つ松明が一瞬激しく燃え上がったかと思うと、激しい炎の奔流が蔓の塊に向かって襲いかかり。

がざざざざざざああつつつつ！

石のほこらを覆っていた蔓の一区画が、まるで生きているかのように――実際生きているのだが――狂ったようにうねり始めた。それでも、攻撃の意図を持って操られた炎はしつこく絡みつき、辺りに生木の焦げる青臭い匂いを漂わせる。

「……もうちよつとね。ジュピター、とどめ刺して」

その匂いに顔をしかめながら、マーズ。

「んつとに人使い荒い奴」

ジュピターはブツブツ言いながら松明をマーキュリーに手渡すと、鞘から愛用のバスタード・ソードを引き抜き。

ざっ！

のたうつ殺人ツタの蔓を勢いよく切り捨てた。地面に転がった蔓の切れ端はまだびくびくと蠢いているが、人を襲う心配はまずない。

「さて。んじゃ、今度こそ入り口を——」

捜しましょう、と言いかけてまた、ヴィーナスの足が止まる。

「今度は何？」

「……今度は、あっち」

ヴィーナスは自分たちが来たのとは反対の、森の中を指さし、

「音がするわ……何か、来る」

シヨート・ソードに手をかけ身構えた。

四人の間に、緊張が走る。

やがて、がさがさと茂みを揺らす音はつきりと聞こえ。

「おい、本っ当にこっちでいーのかよっ」

「うるさい人ですね。古文書に書いてあるんですから、こっちで間違いないといったら間違いないんですっ」

話し声とともに、茂みの中から次々と人が姿を現した。黒っぽい板金鎧にヘアバンド姿の若い男を先頭に、杖を持った魔術師とおぼしき男、銀髪エルフの、おそらく、男。

皆一様に、長い髪を後ろで一つに束ねている。

「は？ 同業者？」

拍子抜けしたように、ヴィーナスが言う。彼女だけではなく、その場にいた誰もが、呆気にとられてしばらく声も出なかった。

「ふん……火の精霊サラムンダを使ったね」

沈黙を破ったのは、銀髪のエルフだった。黒焦げの殺人ツタの残骸を一瞥した彼は、こちらの精霊使いが誰であるかに見当をつけると、エメラルド・グリーンの瞳でマーズの方を睨み、顔をしかめて憎々しげにそう言い放った。

「だったら何」

マーズの方も、腕を組んで斜に構えてエルフの方を睨み返す。

「……あの、あなた達は？」

良くも悪くも沈黙が破られたのをきっかけとばかり、魔術師が尋ねた。髪は栗色で、背の高さと額の広さが印象的な、知的な感じのする青年である。

「ごらんの通り、同業者です」

営業用スマイルで、マーキュリーが答える。

「そのようですね」

青年は、彼女の胸の聖印に視線を留め、

「しかも、こんな所で同じリーダーの神官と出会うとは」

そう言っつて、それと同じ紋章の刻まれた聖印を懐から取り出して見せた。

「そして、ここに来た目的も、どうやら同じだ」

「ええ。残念ながら」

マーキュリーはにこやかな表情を変えずに答える。

「ところで」

神官にして魔術師の青年は、きつ、と表情を引き締めた。

「貴女がたは、なぜこの遺跡に？」

「ああ、近くの村でたまたま……もご」

「冒険者が遺跡探索に来るのに、宝探し以外の理由が？」

鍋の蓋より軽いジュピターの口を、両手で塞ぎながらマーキュリー。それでも営業用スマイルは崩さないあたり天晴れ。

「……ほんとに遺跡だったのね」

聞こえないように呟くヴィーナスに、マーズはそうね、と答えて二人のやりとりを見守る。

「そういう貴男がたは、どこでこの遺跡のことを？」

と、マーキュリー。このほこらが遺跡だと、たった今知ったということはおくびにも出さない。

「私たちは、この古文書を手がかりに」

魔術師は古びた羊皮紙の巻物を誇らしげに懐から出して見せた。

「またそんな偉そうなこと言って、当てになんのか？ タイキ。んな、酔っぱらった勢いで怪しげなおっちゃんから買……むぐふう」

「はいはい、セイヤはちょーつと黙っていて下さいね？」

タイキ、と呼ばれた魔術師は、ころころと笑う板金鎧の青年の口を、学者肌の人間とは思えぬ素早い動きで塞いだ。板金鎧の方はセイヤという名らしい。少し癖のある黒髪で、魔術師に負けず劣らず



長身である。

「さて。どうしたものでしょうね」

こほん、と咳払いを一つして、魔術師はマーキュリーの方を向き直った。

「……『早い者勝ち』というのがこの世界の理ですが」

マーキュリーが答える。

「ほう、それを主張しますか？ 見たところ、まだ入り口も見つけておられないようですが」

魔術師の方も負けてはいない。

「『強い者が勝つ』というのがありますね」

やはりにやかな笑顔のまま、マーキュリー。柔らかな物腰とは裏腹にシビアな話術で、成立させた商談は数知れず。

「……ここで一戦交える、と？」

魔術師の声が低くなる。マーキュリーははつきりとは答えず、ただ穏やかに笑みをたたえているだけ。

「それは賛同しかねますね。できれば、同業者と事を構えるようなことはしたくない。それに彼は相手のパーティーを一人一人、品定めするように観察し。」

「どちらが勝っても、宝探しどころではなくなるでしょう」

最後にラーダ神官を一瞥すると、そう付け加えた。

「同感です」

動じることなく、答えるマーキュリー。

「では、双方のパーティーで一緒に入ることにしましょう。ただし」

魔術師はびっ、と人差し指を立てると、言葉が続けた。

「中で見つけた物に関しては早い者勝ち。それで構いませんか？」

「いいでしょう」

マーキュリーが頷いて、とりあえず商談は成立をみた。

\*

「ほこら」は粗末な造りのものだった。小さな入り口に扉はなく、壁は灰色の石を積み上げたもので、天井は同じ材質の、一枚岩でできている。窓はなく、下は土が剥き出しになっており、苔やひよろとした草に覆われていた。特筆すべきは、中央の地面に円形の井戸のようなものがあること。壁や天井と同じ種類の石で出来た、円い枠である。

「なんだあ？ 井戸か？」

鎧の青年セイヤが、ひょいっと中を覗き見る。

「セイヤっ、だめですよ、不用意に覗き込んだんじゃ」

畏でも仕掛けてあったらどうするんですか、と魔術師タイキがたしなめた。

「ふ……ん。結構深いね」

銀髪エルフは警戒しつつ中をのぞき見ると、おもむろに呪文を唱え始めた。精霊語である。

「『光ウイール・ホイースの精霊よ』

やがて彼の導きに応じてまばゆい光球が姿を現した。光球はふわふわと井戸の中に降りてゆき、やがて底にぶつかる手前で止まった。

「変な仕掛けはないみたいだね。上から見ると限りでは」

そう言って銀髪エルフは背負い袋からロープの束を取り出すと、一方の端を井戸の枠にきつく巻き付けて結び、もう一方を穴の中に垂らした。井戸の縁は少し太くなっているため、少々引っ張ったくらいでは抜けない。

「気をつけて、ヤテン」

ヤテン、と呼ばれたエルフは、声をかけた魔術師の方を一瞥し、井戸の中にひらりと身を躍らせたかと思うと、ロープを伝ってすると降りていった。その身の軽さは単にエルフであるというだけではない。おそらく、盗賊としての心得があるのだろう。

セイヤ、タイキがその後続く。その後にはヴィーナスが続いた。穴の底は石造りの正方形の小部屋になっている。全員が降り立つまでに、エルフの盗賊は部屋の中を一通り調べた。

「……他に変わったものはないみたいだね」

彼はそう言って、部屋の壁面の一つに取り付けられた小さな扉をこんこんと指で叩いた。ブロンズの、粗末な扉である。

「何の仕掛けもないね。鍵もないよ」

そうやって、彼は一応の警戒をしつつも、無造作に取っ手を引いて扉を開――

「あれ」

けられなかった。錆のせいなのか、敷居が歪んでいるのか。とにかく、非力なエルフの腕力では扉はびくとも動かない。

「おうっ、俺の出番か？ のけ退け」

ここぞとばかりにずずいと前に出たセイヤは、大きく息を吸って振りかぶると、ドアの取っ手の少し下めがけて、高々と上げた足を――

「たあっ！」

がつんっ！

叩き込んだ瞬間、固い金属音と、

「★〒# \$ ☆ % ♪ ※ ≡ & △ △ × × ×！」

声にならないセイヤの声が、小さな部屋の石の壁に反響した。お約束ながら、ドアはびくりとも動かない。

「まったく……セイヤ、見てなかったんですか。ヤテンはドアを引いてたでしょうっ」

広い額の、極めて正確に中央に人差し指を当て、タイキは盛大に溜息を漏らした。ヤテンは諦め顔で、掌を上に向けて肩をすくめる。

「どこのパーティーにもバカっているのね……」

ぼそり、とマーズも呟いた。その時ちらり、と走らせた視線の先に誰が居たかは内緒。

仕方ないな、と呟いて、エルフの盗賊はカンテラを取り出すと、その油を扉の四辺に丹念に流し込んだ。

「ほら、セイヤ、もいっかい、今度は引っ張——」

と振り向いたところで、セイヤはまだ足を押さえて悶えている。

「ほらほらジュピタ、力仕事だってさ」

ヴィーナスがほんぽんと背中を押されて、ジュピターが前に出た。

「引っ張んのよ」

分かってるよ、と少し苦い顔で呟いて、ジュピターは扉に手をかけた。

……ずず……

軋む、というよりは摩擦するような音を立てて扉が開き、更に地下へと続く階段が姿を現した。空気はひんやりと冷たく、カビ臭い。古代の遺跡独特の匂いである。完全な闇がほつきりと口を開ける、奈落への入り口のようなそこは、この遺跡が造られてからの数百年誰も足を踏み入れたことのない世界、何が潜んでいるかわからない危険地帯である。

「さて」

ヴィーナスが短剣を抜いた。それに応えるように、マーズがその刀身に『光明』の呪文を付与する。

「うふ♡ ツーといえばカーって感じ？」

「馬鹿ばっか言ってるよ魔法で黙らせるわよ」

「あら。そんなことされたら罠があっても教えらんないわよ？」

鼻白むマーズにしてやったりという笑みを浮かべつつ、ヴィーナスは階段に足を踏み入れた。

二人の盗賊を先頭に、冒険者たちは階段をゆっくりと降りた。危険のないことを確かめながら進むため、ペースはなかなか上がらないが、それでも階段を下りきるまでそう時間はかからなかった。部屋、というほどでもない小さなスペースの、正面にブロンズの扉。階上の粗末なものとは違い、両開きの大きな扉で、簡素ながらデザインが施されている。何より、錆がほとんど見られない。おそらく魔法か何かで保護されているのだろう。

「いよいよ入り口みたいですね。……おや、何か書いてありますね。下位古代語ロー・エンシェントです」  
少しがみ込むようにして、タイキがブロンズの扉に刻まれた文字を読み上げる。

『知恵と、勇気と、正しき分別もて』

『同じ苦悩を我と分かち合はん者に』

「何それ」

小馬鹿にしたように言うヤテンに、肩をすくめるタイキ。

「さあ。知恵や勇気や分別というのにはありますが」

『『同じ苦悩』……なんだか意味ありげですね』

マーキュリーも首を捻る。

「ま、行ってみりゃ分かるっしょ。ドア調べるわよ？」

そう言って、ヴィーナスがドアの前へと進み出た。畏がないことを確認すると、懐の七つ道具から細長い鈎棒を取り出し、鍵穴へと差し込む。

かりかりかりかり

鍵穴を覗き込むことなく、手先の感覚だけで鈎棒を操り。

きちっ

やがて、錠の解かれたことを示す小気味よい音が響いた。ヤテンへの対抗意識なのか、ヴィーナスはことさらにつまらなそうな表情——いかにもそれが朝飯前の大したことのない仕事であるかのよう——を作り、鈎棒を手の中でくるりと一回転させてから懐に戻した。

「さ。開けるわよ」

彼女がそう言うと、皆扉の正面から逃げるように脇へと移動する。扉の向こうから何が飛び出してくるか分からないからだ。

……ぎい……

不気味に軋みながら開いた扉の向こうは、静かな闇だった。

その闇の中にヤテンの操る光精が滑り込むと、ここまでの階段や小部屋と同じ、灰色の石で造られた方形の部屋が現れた。床の石畳は正方形で、滑らかに加工されている。左右の壁には、入り口と同じデザイン、同じ材の片開きの扉。

「分かれ道だね」

一見何の変哲もない小部屋だが、ヤテンは注意深く、ゆっくりと室内に歩を進めた。地下迷宮では、

床自体が罨になっていたり、床や天井に擬態した魔法生物が棲んでいたりすることも珍しくないからである。彼は更に正面の壁も念入りに調べ、

「他に抜け道も無いみたいだ」

そう言って、仲間たちの顔を見やると、

「で、どっちにする」

ちらり、と偶然鉢合わせた同業者たちを一瞥し、

「一緒に行動するわけ？」

いかにも嫌そうにそう言った。

「冗談」

マーズがびくり、と眉を跳ね上げる。

「できれば遠慮願いたいわね」

同意を求めるように、彼女も仲間たちの顔を見た。

「さあ、それは」

穏やかに答えて、マールキュリーは錫杖を正面に掲げた。

「『神のみぞ知る』ね」

「そういうことです」

タイキも同じように杖を掲げる。

「は」



頬をぴくつかせるマーズをよそに、二人は異口同音に神への祈りを口ずさみ。  
やがて、

からーりーんっ

乾いた音が二つ、ほぼ同時に辺りに響いた。木製の杖は右に、金属の錫杖は左に倒れている。

「こっちです」

「こっちな」

タイキは右を、マーキュリーは左を、それぞれ指さした。

「んな決め方でほんつとにいーのかよっ、タイキっ！」

その場にいた全員を代表して、セイヤが声を上げる。

「セイヤ」

タイキはキツ、と視線をセイヤに向けた。

「私が……いえ、大神ラーダが間違ったお告げを下さったことがありますか」

「あ、いや、その、そ、そーゆー訳じゃないんだ、うん」

丁寧な言葉のオブラートに包んだ鋭い眼光に、セイヤは慌ててばたばたと手を振った。

「……やっぱ、人間ってよくわかんない」

ヤテンは聞こえないように溜息をつく。

「ね、ね、ラーダの神官ってこんなのばっかなの？」

「みたいね」

ヴィーナスとマーズもひそひそと囁きあっている。

「マーキュリー、あの……同じ神様に聞いたのに、なんで答えがあつちと違うのさ？」

素朴な疑問をそのまま口にするジュピター。後ろでヴィーナスが口パクで『ばかっ』と叫んでいるのには気づいていない模様。

「『信仰心の違い』とでも言えはいいかしら」

マーキュリーはにつこりと笑みを浮かべ、ジュピターに向かって、しかし周囲にもはっきり聞こえるように答えた。

その言葉にタイキはむっ、と眉を顰めながらも、そこはアカデミックでインテリジェントでソフィステイケイティッドがモットーのラーダ神官、声を荒げて反論するようなことはせず。

「そうですね。何が違うか、はともかく」

あくまでも受け答えは穏やかに、ジェントルに、

「みなさんも、せいぜい、ご無事で」

余裕たっぷり、ウイッティイーに（でも目は笑ってない）。

「ええ。貴男がたも」

そしてエレガントに（顔は笑っているが何を考えているかは不明）

かなりコワイ笑みを浮かべつつ見えない火花を散らすふたりの神官に従い、冒険者たちは左右のドアに消えていった。

……ぎい……

念入りに扉を確かめ、ヴィーナスは取っ手を引いた。中は先刻の分かれ道の部屋と同じく、滑らかに加工された正方形の石畳を敷き詰めた四角い部屋である。特筆すべきは、部屋の四隅にちょうど人の身長ほどの高さの張り出しがあり、奇妙な像がその上に鎮座していること。角と牙を生やした醜い容貌、骨張った手足に不釣り合いなほど大きく鋭い鉤爪、蝙蝠を思わせる翼に爬虫類のような尾。細部まで精巧に作られているものの、どう見ても石の作り物だ、が。

「ガーゴイルね」

「ええ。絵に描いたようなガーゴイルだわ」

マーキュリーとマーズが口々にその正体を看破した。

「ガーゴイル？」

「この遺跡の番人、といったところかしら」

首を傾げるヴィーナスに、マーキュリーはごく簡潔に答え、部屋の中央を指さした。

「石像みたいに見えるけど、私たちが真中あたりまで行けば、動き出して襲って来るわ。たぶん」

ガーゴイル。

魔法によって像に生命が与えられた一種のゴレム。その外見は石像とほとんど見分けがつかないが、排除すべき敵が近づくと突然襲いかかってくる。古代王国が滅びてしまった今となつては彼らを生み出す技術も操る術も失われてしまっているが、地下迷宮などの遺跡では今でも見つけることがあ

る。

「つまり」

言って、ジュピターは剣の柄に手をかけ。

「あれを叩き壊さないと先に進めないんだな？」

「ま、そういうことね」

マーズの答えを待つまでもなく、すらりと剣を抜いた。

「やあだ、固そう。刃が傷んじゃうじゃない」

ぶつぶつ呟いて、ヴィーナスも小剣を抜く。

冒険者たちは今にも動き出さんばかりの石の怪物と睨み合いながら、じりじりと前進する。

やがて、剣を構える二人が部屋の中央まで進み出たその時。

ばっ！

石像たちが、その蝙蝠に似た翼を広げたかと思うと。

がこっ

不意に、冒険者たちの足下が揺れた。正方形の石畳が交互に、激しく上下に動き始める。

「わっ！」「あっ！」「きゃっ！」「くっ！」

波打つ床に足を取られてその場に転がる四人。数百年ぶりの目覚めを喜ぶかのように辺りを旋回していた怪物たちは、やがて各々が目星をつけた獲物に向かって鉤爪を振りかざした。翼を持つ彼らに足場の悪さは関係ない。

ジュピターは腕の鎧でそれを受け止める。分厚い金属鎧に、石の怪物の固い爪も鈍い音を立てて弾かれた。

ヴィーナスは、正面から飛んできた一体を軽い身のこなしでかわした。転んだ体勢から床に手をつき、足を蹴り上げ、体を捻って着地する。アクロバティックな動作が、ジュピターの力技とは対照的だ。

が。

「くっっ!」「あぐっっ!」

床石の擦れる音に混じって、押し殺した短い悲鳴が上がった。

マーズが床に座り込み、左肩を押さえて痛みに顔を歪めている。マーキュリーも法衣の腕に血を滲ませていた。ガーゴイルの鉤爪は、武器での戦いの心得を持たず鎧らしい鎧も身につけていない彼女たちには脅威だった。

「マーズ!」「マーキュリー!」

ヴィーナスとジュピターが口々に叫ぶ。

ガーゴイル達は天井近くで旋回すると、絶好の獲物を見つけたとばかり、再び傷付いた二人に狙いをつけた。

\*

……ぎい……

念入りに扉を確かめ、ヤテンは取っ手を引いた。中は先刻の分かれ道の部屋と同じく、滑らかに加工された正方形の石畳を敷き詰めた四角い部屋だが、

「なんだあ、壊れてんじゃねーか」

床一面に散らばった瓦礫を見て、セイヤが頓狂な声を上げた。

「ほんとによかったのかよ、こっちで」

「ええ、いいんですよ。ほら、周りをよく見て」

タイキは室内をぐるりと指さし、注意を促した。

「壁も天井も崩れていないでしょう？ 床だって、ひび一つ入っていない。これは、意図的に置かれたものですよ」

「……なーんかやなカンジ……」

ばたんっ！

ヤテンが呟いたその時、三人の後ろで扉が勢いよく閉まった。そしてどこからともなく聞こえてくる、低くくぐもった声。

声は上位古代語ハイ・エンシェントだった。

「！ この呪文は——」

タイキが警告を発するより先に、その変化は起こった。

辺りに転がっていた石が次々に動きだし、人の形を取り始めたのだ。握り拳ほどの小さな石が、人

間大の人形となって三人に向かって歩いて来る。

「うわっ、な、なんだあっ」

「ストーン・サーバント、魔法で作る小さなゴーレムです！　ちなみに、私にも作れます」

「誰もんなこと聞いてねーっ！」

そう言っている間にも、ゴーレムはわらわらと彼らに向かって歩いてくる。

そのうちの一体が拳を振り上げ、セイヤに殴りかかった。セイヤがそれを咄嗟に剣で受け流すと、ぎんっ、という鈍い金属音が密室となった小部屋に響いた。

「をわっ。当たったら相当痛そーだぞ！」

「ったりまえだろ、石なんだからっ」

ヤテンがツツコみながら右手で激しく宙をかき混ぜる。精霊に語りかける時の一種の儀礼だ。

「『ウイール・オー・ウイストフ光の精よ』！」

彼の導きに応じて現れた光の精霊が、セイヤを殴ろうとしたゴーレムに当たり、一瞬の激しい光とともに弾けて姿を消した。さらにセイヤの剣の一撃で、ゴーレムは崩れて石ころに還る。

だが、その後ろからは新しいゴーレムが次々と姿を現していた。

\*

「マーズ！」「マーキュリー！」

ヴィーナスとジュピターは口々に叫ぶが、激しく動く床の上では駆け寄るどころか立っていることすらままならない。翼を持つガーゴイル達は、そんな冒険者達をあざ笑うかのように飛び回っている。びきっ

その姿がどうやら気難しい魔法使いの逆鱗に触れたようで。

「……………」

低い呟きとともに素早く複雑な印を切るマーズ。左の腕が大きく動く度、その顔が苦痛に小さく歪む。

「ジュピター！ ヴィーナス！」

その様子に、マーキュリーははっと何かに気付いたように慌てて二人を呼んだ。

「戻っ、いえ、伏せて！早く！」

時を同じくして、マーズの呪文が完成し。

「『――破壊の炎に』！」

どこおおーんっ！

轟音とともに、中空で炎が弾けた。

「きゃっ！」「によわっ！」

床に突っ伏すヴィーナスとジュピター。

飛び回っていたガーゴイル達は勢いよく吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。一匹はそのままずりりと床にずり落ち、びくりとも動かなくなった。あとの三匹は多少よたついているものの、まだ宙に



浮いている。

「ちっ。しぶといわね」

「こら！ 何が『しぶといわね』だ、危ねーだろっ！」

憎々しげに呟くマーズに、ジュピターがツツコンだ。

「ジュピター、後ろ！」

マーキュリーの声が聞こえてか否か、ジュピターは体を返して剣を振るった。安定しない床の上で膝立ちのまま腕の力だけで振るわれた剣だが、それでも飛んできた怪物の翼を叩き折るだけの威力を持っていた。所詮は魔法で与えられた仮初めの命、血を流すことも悲鳴を上げることもなく、怪物は床に叩きつけられて大きくバウンドしながら転がり、そのまま動かなくなった。

「うー……マーズの愛って痛くて熱いのね」

床でぶつけた額をさすりながら、ヴィーナス。髪もちよつびシコゲていたりする。でも軽口を叩くことは忘れない。

「誰が愛よ！」

マーズもツツコミは忘れない。

「こらそこっ！ 痴話喧嘩してないで手伝えっ！」

「誰が痴話喧嘩よっ！」

ごっ！

不意に音がして、ジュピターの背後に迫っていたガーゴイルが素焼きの花瓶のように碎けて落ちた。

マーキュリーの放った『気弾』の術である。

「ジュピター、よそ見しちゃ駄目っ！」

マーキュリーの声に、軽くウインクで応えるジュピター。

「あ、いいなー。マーズ、私たちも愛の連係プレイー」

「いつまでも言ってるとおんたに魔法ぶち込むわよっ！」

「もういいよ、終わったから」

ウィーナスとマーズが舌戦を繰り広げている間に、ジュピターの剣が最後の一体を叩き落として戦闘は終了した。床石の動きも次第に小さくなり、やがて完全に止まると辺りには再び静けさが戻った。

\*

「——『マナの呪縛を解き放ちたまえ』」

タイキの『解呪』の呪文が完成し、ゴーレムが一体、糸の切れたマリオネットのようにその場でがらりと崩れる。

「くっ、一体しか効かないか……」

舌打ちをするタイキ。迷宮のからくり仕掛けとはいえ、仮にも相手は古代魔法王国の魔術師が遣した呪文。そう簡単にいくものではない。

ヤテンも呼び出した光精をぺちぺちとぶつけてみるが、次々に湧いて出る大量のゴーレム相手では

せいぜい足止め程度。

「駄目だ、いちいち倒してたらこっちが参っちゃうよ！」

「だからって倒さねーわけにいかねーだろっ！」

セイヤは怒鳴って、剣を目の前のゴレムに叩きつけた。ぎいん、という甲高い音がして、石人形をよろめかせるが柄を握りしめる手にもびりびりと衝撃が走る。

「かあっ！ んなことしてたら刃がぼろぼろになっちまうっ！」

「っ……仕方ありません」

タイキが重々しく口を開いた。

「逃げましょう！」

危うくずっこけかける二人。戦闘中にずっこけるのは大変危険なので、よい冒険者は真似してはいけない。

「こら待てっ！」「何それ！」

そして大ブーイング。

「後ろに逃げるんじゃないですよ！ 向こうの扉を強行突破するんです！」

そう叫んで、タイキは呪文の詠唱を始めた。

『「——ひとときの仮初めの命を」——！』

やがて「力あることば」が解き放たれるが、小石の山から石人形が現れてはよちよちと彼らに向かつて歩みをすすめている。

が。

タイキの号令一下、突然石人形たちが同士討ちを始めた。

「私が作ったゴーレムです。今のうちに！」

彼の呪文で生み出されたゴーレムは二体、のそのそと歩いてくるゴーレム達の、足を執拗に狙って次々と蹴倒してゆく。敵のゴーレムは入ってきた「人間」を襲うように出来ているらしく、タイキの作ったゴーレムはまったくノーマークである。力では互角、数でこそ負けるが作戦勝ち。その隙に乗じて、冒険者たちは次の扉へと突撃する。

無論、扉にはがっちり鍵がかかっていた。ヤテンが舌打ちをして鍵穴に屈み込む。その背後を、タイキ作のゴーレム達とセイヤが懸命にガードしていた。

「くっ。ご丁寧に罠まで仕掛けてあるや」

「何でもいから早くしろーっ！」

「言われなくたってやってるってば！」

剣劇の音を後ろに聞きながら、鍵と格闘するヤテン。

やがて、

きちっ

金属音がして、扉が大きく開き。

ゴーレム達を後に残し、三人は転がるように扉をくぐった。

\*

扉に鍵は掛かっていなかった。

ヴィーナスはさらに念入りに扉を調べて罾が仕掛けられていないことを確かめると、慎重に、ゆっくりと取っ手を押した。

「『恐れなくともよい』」

部屋の中から、声が聞こえた。張りのある、凜とした男の声だ。紡がれる言葉は下位古代語<sup>ロー・エンシェント</sup>、いしえの魔術師達の言語である。

「『真に賢く正しき心を持つ者に、道は開かれる』」

開いた扉の向こうに、声の主は居た。若々しい、知性溢れる端正な顔の青年。肩まで届く髪は、美しい黄金。

「『来訪者よ、汝の求むるは何ぞ』」

だが、正方形のの小部屋の真ん中に座する姿は人間のそれとは似ても似つかないものだった。毛皮に覆われた獣の身体の、背中に折り畳まれているのは鳥の翼。まさしく異形の者と呼ぶにふさわしい姿である。

「ああ！」

その姿を見るや、ジュピターがぼんと手を打った。

「あれだろ。ほら、ダンジョンの中でぼけっと待ってて、来た奴に片っ端から話しかけてくるやつ」

「ああー、そうそう」

ヴィーナスが合いの手を入れる。

「で、しかもそれがヘンチクリンなぞなぞなのよねっ。名前は……えーと。スナフキン、だっけ？」

「スフィンクスよ。馬鹿」

即ツツコミを入れるマーズ。

「ちよっと、みんな、聞こえるわよ」

「全部聞こえておるわ」

マーキュリーが慌ててたしなめたが、スフィンクスは尻尾でばたばたと不機嫌そうに床を叩きながら、共通語でそう言った。

「……まあよい。私は蛮族にも寛大だ。」

『『蛮族、ですって?』』

今度はマーズがむっとして口を開いた。

『『何百年も無駄に歳とって口のきき方——むぐ』』

ご丁寧にも下位古代語ロー・エンシェントで喧嘩を売ろうとするマーズの口を、マーキュリーが慌てて押さえた。ジュピターとヴィーナスも加わって三人がかりでマーズを黙らせる。スフィンクスは笑って誤魔化す冒険者達に苦笑いをつくれると、こほん、と咳払いをしてから問答の続きを始めた。

「では、改めて問う。来訪者よ、汝の求むるは何ぞ」

「我らの求むるは、我らが偉大なる先達の残せし遺産」

沈黙させられたマーズに代わって、マーキュリーが教科書通りの答えを返す。

「賢き守護者よ。汝の守りし道を、我らの前に開き賜え」

彼女の丁寧な言葉に、満足げに頷くスフィンクス。

「ならば、我が問いに答えよ。我が問いに答えること能わずば、此処を通ることはまかりならぬ」

「承知」

マーキュリーが頷くと、スフィンクスはこほんと咳払いをした。

「では。フロントホック・ブラとは何ぞや」

「……………は？」

四人の目が、一斉に点になる。

「うわ。変態」

「顔は若いけど実はけっこーオヤジ？」

「まあ、んなどこに何百年も独りでいたら、性格も歪むわね」

「知らなかったわ。魔法生物にも性的な嗜好があったなんて」

「言うな！」

顔を真っ赤にして一喝するスフィンクス。

「この謎を問いかかけよとは、我が主が命じたこと。私とて好きで問うていのではないわ！ それよ、我が問いに、答えるのか、答えぬのか。答えぬのなら早々に立ち去れい」

最後の方は口調がちよっぴりヤケ気味である。

「ええと……ではお答えします。それは、『背中ではなく前で留め具を留めることのできるブラジャ―』……です」

最後の方は口調がちよっぴり恥ずかしそうなマーキュリー。

「うむ。それこそ我が主の望む答えぞ」

スフィンクスは鷹揚に頷いた。

「うわ。女の子にえっちなこと言わせて喜んでるう」

「変態」

「サイテー」

「うるさい」

スフィンクスが立ち上がり脇に退くと、その奥にあった扉が勢いよくばん！と開き、遺跡の更に奥へと続く回廊が姿を現した。

「早く行け。とつとと行け。二度と戻って来るなっ」

暗い迷宮の底で独り待ち続けていた幻獣は、顔をしかめて忌々しげに唸りながら、数百年ぶりにせつかく訪れた来訪者たちを追い払った。

\*



扉に鍵は掛かっていなかった。

ヤテンはさらに念入りに扉を調べて罾が仕掛けられていないことを確かめると、慎重に、ゆつくりと取っ手を押した。

「『おお。久々の来訪者か』」

部屋の中から、声が聞こえた。低く、しわがれた老人の声だ。紡がれる言葉は下位古代語<sup>ロー・エンシェント</sup>、いにしえの魔術師達の言語である。

「『野心に似合う賢さを持つ者にのみ、道は開かれる』」

開いた扉の向こうに、声の主は居た。深い皺の刻み込まれた顔に、不敵な笑みを浮かべた白髪の老人である。

「『来訪者よ、汝の求むるは何ぞ』」

だが、正方形のの小部屋の真ん中に座する姿は人間のそれとは似ても似つかないものだった。毛皮に覆われた獣の身体に蠍の尾を持ち、背中には蝙蝠の翼。まさしく異形の者と呼ぶにふさわしい姿である。

「『カツカカカ。そう構えずともよい。我は、我が主の残せし遺産を守護する者。この先へ進みたくば、我が問いに答えよ』」

思わず身構える冒険者たちに、異形の者は狡猾そうな光を宿した笑みをたたえて語りかけた。

「？ 笑ってるぞ？ 何て言ってるんだ？」

「今からする質問に、答えられたら通してくれるそうですよ」

拍子抜けしたように尋ねるセイヤに、タイキが答えた。

「信じているの？」

警戒を解かずに、ヤテン。

「さあ、どうでしょう。マンティコアは暗黒神の僕ですから」

『『饅頭怖い』？』

「セイヤ……あなたの頭は脳みその代わりにブロボでも詰まってそうですね」

ふうっ、と盛大に溜息をつくタイキ。

「ふ……ん。じゃ、信用できないか」

「さあ、それもどうでしょうね」

ヤテンの問いに、タイキは右手で眼鏡に触れながら答えた。

「マンティコアは邪悪な知恵の守護者、とも言われていますね。まんざら嘘とも言い切れませんよ

……まあ、戦わずに通して貰えるなら、それに越したことはないでしょう」

彼はそう言うと、マンティコアに向かって告げた。

『『賢き守護者よ、貴殿が問い、我に示し賜え。秘密への扉を開く鍵となる、その問いを』！』

マンティコアは鷹揚に頷いた。

『『ならば問う。フロントホック・ブラとは何ぞ』』

「……………」

……………は？」

タイキの目が点になる。

「あ、あの」

『『答えぬのか』』

「『い、いえっ、お答えします。それは……』』

少し口ごもるタイキ。

「『ええと。前ではずせるブラジャー、のことですね』』

『『ふむ』』

マンティコアはにい、と笑った。

「『それは、我が主の望む答えではないな』』

「なっ」

タイキの声が裏返る。

「『何故っ！ この答えのどこが間違っているとー』』

「『知るか。とにかく、それは我が主の望む答えではない。わしに言えるのはそれだけだ』』

『『そんなっ！』』

「なんだなんだ、ハズレかよ、タイキ！」

出る幕なしだったセイヤが、ここぞとばかりに割って入った。

「違いますっ！ そんな筈はっ」

「まあまあ。いーから俺にも答えさせろよ」

いきり立つタイキをむぎゅと押さえて前に出るセイヤ。

「『うむ、よかろう。答えてみよ』」

「ああ？ 分かるように話せや、じーさん」

「ったく、古代語も解らないのに……」

あちゃあ、とタイキは額に手を当てて首を振った。

「なんじゃ？ お前は蛮族か」

マンティコアは少し呆れたように共通語で言った。

「まあよい、では問おう。フロントホック・ブラとは何ぞや」

「はあ あんだよタイキ、こんな問題にお前、答えらんなかったのかよ！」

「うるさい人ですね！ つべこべ言わずにあなたも答えてみてください！」

からからと笑うセイヤに、顔を真っ赤にして反論するタイキ。

「簡単じゃねーか。フロントホックつつつたら、ほら、あれだろ。前ではずせる奴だろ？ なあ」

「ふむ」

マンティコアはにい、と笑った。

「それも、我が主の望む答えではないな」

「はあっ」

横でタイキがほら見なさい、と呟いた。

「何でだよっ！」

「何故もなにも。それは我が主の望む答えではない、それだけだ」

いきり立つセイヤに、マンティコアは鼻で笑いながら答えた。

「待てよ！ フロントホックつつたら、前のこのへんに留め具がついてて、こう、ぶちっ、と前で外せる奴だろう」

「セイヤ……そんなものジェスチャー付きで説明しないでください。気持ち悪い」

「お前はどうか、妖精族の若造よ」

セイヤとタイキの漫才を無視して、マンティコアはヤテンの方に視線を向けた。

「我が問いに答えられるか」

「あ、僕はパス。そーゆーの、守備範囲外だから」

ヤテンはしれっとした表情でばたばたと手を振った。

「くおら待てヤテン！ それじゃまるで俺らはそーゆー話題が守備範囲ど真ん中のスケベみたいじゃねーか！」

「そういう問題じゃないでしょうセイヤ！」

激しい口調でツッコむタイキ。

「ヤテン！ これに答えられなければ、私たちはこのマンティコアと戦うことになるんですよ！」

「いーよ。僕ははなからそのつもりだし」

ヤテンはそう言って、マンティコアに視線を投げた。隙のない、挑発的な視線である。

「ほう」

不意に、マンティコアがその双眸に危険な色を宿し。

「よかろう。ならば与えん、愚か者に死の報いを！」

咆吼とともに背中の翼をばさり、と広げた。

\*

ダンジョンはスフィンクスの部屋の奥へとさらに続いていた。石の回廊の、代わり映えない風景の中をゆつくりと、先頭のヴィーナスの後をマーキュリーとマーズが肩を並べるように歩き、ジュピターがいちばん後ろに続く。歩みが遅いのは、先をゆくヴィーナスが行く手の安全を念入りに確かめているからである。

「？ マーズ、どうかした？」

ふと、マーキュリーが尋ねた。彼女が覗き込んだマーズの表情は、不機嫌そうな険しさを湛えている。

「別に。どうもしないわ。ただ——」

「ただ？」

「ただ。嫌あな予感がするのよね」

「何が？」

「このダンジョン造った魔術師よ。おかしいと思わない？ スフィンクスにあんなこと訊かせるなん

て！」

絶対変態だわ、と唸って彼女は眉間の皺をいっそう深くした。

「あら。怒った顔も綺麗だけど、眉間の皺はよくないわ、マーズ♡」

くるりと後ろを振り返って、ヴィーナス。

「なに人の会話を割り込んでんのよ」

マーズの受け答えは例によって氷点下の冷たさである。

「まあまあ。そう目くじら立てないで、リラックスリラックス♪」

それにめげることもなく、ヴィーナスはそう言ってマーズの背中をぼん、と叩いた。

「！」

次の瞬間、マーズの表情が強張り。

ぼぐっ！

「何すんのよこの変態っっっ！」

右フックが炸裂、あわれヴィーナスは床に沈んだ。

マーズキュリーとジュピターは何が起こったのか解りかねて呆気を取られていたが、

「んあああもうっ、何がリラックスよっっっ！」

「……ああ。久々に見たな。ヴィーナスの『ブラ外し』」

心地悪そうに胸の辺りを押さえて身をよじるマーズの姿を見て、納得したように頷いた。

「そういうえば、凄腕のスリって、すれ違いざまに財布どころか下着までスリ取ることができる、って

聞いたことがあるけど」

「ヴィーならできそうだよな」

そういうの好きそうだし、と頷くジュピター。

「うふふ♡ 実是可以るのよね」

不意にヴィーナスはむっくりと身を起こして、得意げに人差し指をびつ、と立てた。

「何ならやってみせ——」

げしっ！

「い・い・か・げ・ん・に・し・な・さ・い・よ。ええ？」

マーズの踏み込みが後頭部に炸裂、ヴィーナスは再び石の床に突っ伏した。

「その二人も。変に煽らないで頂戴っ！」

ぐりぐりぎゅむぎゅむふみふみふみっ

「あの……いくらヴィーナスでもそれ位にしておいた方が」

「ふん」

たしなめるマーキュリーの言葉にもそっぽを向いて、マーズはすたすたと歩き出した。その先には扉が待っている。

「って、マーズちゃん待って！ そっちはまだ——」

不意に、ヴィーナスが弾かれたように飛び起きた。

彼女の手が、声が、届くより先に、マーズは扉の取っ手を掴んで。



「畏が——！」

引いた。

「……痛っ」

取っ手を握る指先に、ちくりと小さな痛みが走り。

次の瞬間。

どくんっ

心臓が跳ね、体じゅうを内側から灼かれるような感覚がマーズを襲った。彼女の中のあらゆる器官が裏返しにされるようなそれは、一瞬激しい苦痛を伴い。

「マーズっ！」

仲間の呼ぶ声を遠くに聞きながら、彼女は意識を手放した。

黒いローブが支えを失ってはらりと床に落ち、銀の指輪が石畳の上をころりと転がる。身につけていたもの達を残し、彼女の姿だけが忽然と消えた。

\*

「……うー……死ぬかと思った……マジで」

左右の足をよろよろと、何とか交互に前に出しながら、セイヤが呻くように口を開く。

「大丈夫ですよ。死にそうだ死にそうだと自分で言っている間は、人間死なないもんです」

タイキが突き放すように言う。

「るせーっ！ 大体お前ら、あんだよ、俺ばっかし戦わしゃがって。ちったあ魔法で手伝ってくれたっていーだろっ」

「僕は戦ったじゃん」

先頭を歩いているヤテンが、振り向きもせずそう言った。行く手の安全を確かめる役目を担っている彼には、二人の漫才に付き合っている余裕などないのである。

「ってか、とどめ刺したの、僕だし」

「っ、それは、その前に俺の会心の一撃があつたからでっ」

「その前に尻尾の毒針にやられて『ぎゃー！ 死ぬー！』なんてわめいてたのは誰ですか」  
「ぎゃー、死ぬー、のところだけ声を裏返して、タイキが言う。」

「解毒も怪我の治癒もしてあげたでしょう。何もしてないなんて心外ですね」

セイヤはうつ、と言葉に詰まった。

「い、いつくら何でもそこまでみつともなかあなかつたぞ」

「あー、左様ですか。じゃ、解毒も治癒もいらぬお世話でしたか。そんな余計なことはせず光の矢でもぶつけた方がよかつたですかね」

「だっ、誰もんなこと言つてねーだろっ」

「セイヤ、タイキ」

不意にヤテンが声をかけた。

「ドア。開けるよ」

じゃれ合うように口論していた二人は、すぐにきりりと表情を引き締め、冒険者の顔に戻った。ドアを開くと、水の流れる音が聞こえてきて。

そして、明かりは部屋の中央に何かの姿を浮かび上がらせた。

「馬？」

「うん ……いや、ちよつと違いますね」

誰に問うともなく発せられたセイヤの言葉に、タイキが答えた。

「ほら、あの角。ユニコーンです」

ユニコーン。

額に金色の角をもつその姿から、一角獣とも呼ばれる白馬。人間の乙女にのみ心を許すという気難しい生き物である。彼らの角はいかなる病も怪我もたちどころに治してしまう強い癒しの力を持ち、それが仇となって今や絶滅危惧種とされている。

「いくらあなたでも名前くらいは聞いたことがあるでしょう」

「ああ、まあ……で、何でんどこにユニコーンがいるんだよ」

「そんなこと私に聞かないでください」

「ってか、俺でも知ってる、ってどーゆー意味だよ」

「文字通りの意味です」

「ね。盛り上がってるとこ悪いんだけど」

ヤテンは少し呆れたように声をかけた。

「よく見てよね。こんなところに本物のユニコーンがいるわけないじゃん」

片方の前足をあげたままの姿勢で、ぴくりとも動かない一角獣。正方形の部屋の中央に設けられた、流れる水を湛えた円形の泉の中に立ってるそれは、今にも動き出しそうな躍動感に溢れているが、やはり作り物にすぎなかった。

「台座に何か書いてある」

ヤテンはゆっくりと像に近づいた。

『姿は違えど、その本質は変わらず』

我に触れんとする者、しかと心得よ』

「何これ」

彼はそこに刻まれた古代の文字を読み上げると、そう言っただけで肩をすくめた。

「さあ……我、というのはこのユニコーンのことなんですよけど」

タイキはそう言うのと、何やら小さく呟いて軽く印を切った。魔力感知の呪文である。

「少なくとも、何か魔法の力が働いていることは確かですね」

「どんなの？」

「さあ、そこまでは」

「あ、そ」

魔法って役に立ちそうで案外役に立たないね。

そう言いたいのを、ヤテンはぐっと飲み込んだ。

「とにかく、迂闊に触ると——」

「あんだよ二人とも、作りもんの馬相手にビビってどーすんだ」

セイヤはそう言って、本物の馬にそうするように後ろ足の付け根をべちべちと掌で叩いた。

「って言ってるそばからセイヤっ！」

どんっ！

「ぐっ！」

その瞬間、強い衝撃がセイヤを襲った。まるで見えない力に突き飛ばされるように彼の身体が吹き飛ばす。例えるなら、馬の後ろ足に蹴飛ばされるように——勿論馬は作り物で、ぴくりとも動いてはいないのだが。

「セイヤ！」

もんどり打って倒れるセイヤに、タイキが慌てて駆け寄った。

ヤテンは顔に手を当て、『馬鹿』と呻くように呟く。

「大丈夫ですかっセイヤ！」

「あづ痛痛痛痛痛痛……あんまし大丈夫じゃねえ……っ」

げほげほと咳き込むセイヤ。

「まったく……魔法の力が働いてるから迂闊に触るな、と言ってるそばからこれです。魔法の力を侮っては駄目だいつも言ってるでしょう 魔法だけではありません、罠だっどこに仕掛けられてる

か分かったもんじゃありません。あなたみたいに何も考えずにどこもかしこも迂闊に触る人は命がいくつあっても足りません。だいたいあなたは人の話を聞かなさすぎます！ いつもいつも私やヤテンが、気をつける勝手に触るなど口を酸っぱくして言ってるというのにあなたときたら――」

「タイキ」

ヤテンが、まくしたてる彼の肩をぼん、と叩いた。

「……先に怪我治してやったら？」

\*

「マーズ………マーズっっっ！」

「落ち着いてヴィーナスっ、マーズはまだそこにいるの！ 気をつけないと踏んづけちゃう！」

「嘘っ！ 今消えたじゃないっ！」

取り乱して駆け寄ろうとするヴィーナスをマーキュリーが引き止めた。その手を振り解こうと身もかくヴィーナス。

「踏んづけたりしたら本当に死んじゃうわ！ それでもいいの」

マーキュリーの言葉に、ヴィーナスは雷に撃たれたようにその場に固まった。

「どういことだよ。そこにいるとか、踏んづけるとか」

訳がわからない、というような顔でジュピターが問う。

マーキュリーは床に落ちたマーズの指輪を拾い上げ、黒いローブの傍らに屈み込むと、その下を注意深く探り。

「それは……？」

そして見つけたものを、二人の前に示した。

それはどう見ても人形だった。身の丈は普通の人間の二の腕ほどの長さで、自ら動くこともなく、一糸纏わぬ姿でぐったりと手足を投げ出した人形。だが、その整った顔立ちと腰まで届く黒髪は、紛れもなくマーズのそれである。

ヴィーナスとジュピターは驚愕の表情で息を呑んだ。

「特殊な毒の所為よ。『リビング・ドール』といって」

マーキュリーは人形の姿になったマーズをローブの上に横たえ、布の端でその身体を覆った。

「それを受けた人間の、姿を変えてしまうの。男性なら怪物に、女性ならこんな風に——人形みたい」

「それで、マーズは——」

まだ呆然としたように、ジュピターが問う。ヴィーナスは今にも泣き出しそうな顔で佇んでいる。

「大丈夫。助かるわ」

マーキュリーは微笑んで頷いた。

「姿は変わっても、ちゃんと生きているわけだから。解毒さえできれば元に戻るわよ」

彼女はそう言うと、掌をそっと人形の上に載せ、瞑目し神経を集中させた。

「『偉大なる智神ラーダよ。その力もて、全き肉体を蝕まんとする邪悪な力を消し去り賜えー』」

ジュピターとヴィーナスが固唾を呑んで見守る中、その唇が神への祈りの言葉を紡ぎ終えると、人形はみるみるうちに普通の人間の大きさにまでなり、やがてよく見知ったマーズの姿になった。

——よく見知った姿、というのは正確さを欠くだろうか。

彼女の一糸纏わぬ姿など、滅多にお目にかかれぬ代物だ。

「う……ん」

やがて小さな身じろぎと呻き声とともに彼女は目を覚ました。

「……え？　つと……」

「マーズっ！」

ふらつく頭を手で支えるようにしてゆっくりと身を起こしたマーズに、ヴィーナスが飛びついた。主人を待ちわびた子犬のように、声を上げ、顔をくしゃくしゃにして。

——マーズが自分の置かれた状況を把握するまで、あと三秒。

二。

一。

……………

「な——に——すんのよおおおっつ！」

ごっつごっつごっつ！



「ユニコーンは気難しいんだ」

部屋の壁を丹念に探りながら、ヤテンはほうっ、と溜息混じりに言った。

「うっかり触ろうとしたりするから蹴られるんだよ」

「気難しい？ 蹴られる？ 何言ってるんだ」

したたかにぶつけた頭がまだ痛むのか、手でさすりながらセイヤが尋ねる。

「どういうことですか？ ヤテン」

タイキも首を傾げる。

「確かに、作り物だけどさ」

ヤテンは振り向きもせず答えた。

「命の精霊が働いてるのが見えた。普通の生き物とはちょっと違うけど、ただのハリボテ、ってわけでもなさそうだ」

「それは。だから、魔法の力が働いてると言ったでしょう、私が」

「だからさ。本物のユニコーンと一緒に気難しいんだ」

口を挟むタイキはとりあえず無視するヤテン。

「っ、そーゆーことは早く言えよっ！」

「ってか、言うより先に触ったのセイヤじゃん」

\*

拳を握りしめるセイヤもとりあえず無視するヤテン。

不意に、壁を探る彼の手が止まった。

「開けるよ」

その言葉に、皆の顔がきりりと引き締まる。

壁の一部が横に滑ると、さらに下へと続く階段が姿を現した。闇の中にぼつかりと口を開けたそれは、その先に待つ何かを予感させる空気を漂わせていた。

「ビンゴっばいね」

普段はクールなヤテンが、ごくりと息を呑んだ。

「彼女たちは、まだ通っていないようですね」

頷いて、タイキ。

「やったじゃん。ついにお宝とご対面、ってかあ？」

「また先走って怪我しないでくださいよ、セイヤ」

「そうそう。セイヤは一番後ろ」

わかっているよ、と渋い顔をして、セイヤは言われたとおり二人の後ろについてゆっくりと階段を降りた。

階段の下に、扉はなかった。

そこは広間になっていた。これまで見た中でおそらく一番の広さを持つであろうその部屋は、壁も天井も床も継ぎ目一つない、無機質な、明らかに異質な造りをしていた。

そして、部屋の中央。

台座が設けられ、その上に金属製の、人の胸像のようなものが鎮座している。人、というにはあまりに直線的な形状は、ゴレム、と言うのが一番近いであろうか。そして、特筆すべきはその腕である。細い腕は異常なほど長く、その数は三対。六本の手にはそれぞれ剣や戦斧が握られている。

「さて。問題です」

武装した胸像を凝視して、どちらにともなくタイキが問う。

「このダンジョンの一番大事なお宝は、どこにあるでしょう」

「そりゃあー」

セイヤが胸像の下の台座を指さす。

「あそこだろ、やっぱ」

「だよねえ、やっぱ」

ヤテンは小剣を抜くと、半身に身構えながらじりじりと胸像に近づいた。そして、その長い腕の間に足を踏み入れた途端、彼をめがけて左右から戦斧が振り下ろされた。

がっつ！

ヤテンは素早く後ろに跳び退った。一瞬後、彼が立っていた場所に二本の戦斧が叩きつけられる。

その腕の長さ故か、武器が振り下ろされるといよりは、まるでどこからともなく武器が飛んできようだった。

「うあ。当たったら死にそう」

当たらないくせに、と、こつそりひとりツツコミするタイキ。

「人形のくせにやるじゃねーか」

セイヤは剣を抜き放つと、気合い一喝、ゴーレムに向かって踏み込んだ。たちまち二本の戦斧が彼めがけて振り下ろされる。

「はあっ！」

ぎんっ！

最初の一振りを剣で受け流し、もう一方を紙一重でかわした。

間髪入れず、今度は長剣が襲いかかる。

その太刀筋をセイヤは読んでいた。

ぎい……んっ！

セイヤの振り下ろした渾身の一撃は金属の継ぎ目を捉え、ゴーレムの持つ斧をその腕ごと叩き落とした。しかし、痛みを感じることも怯むことも知らぬ人形は、次々に得物をセイヤめがけて振り下ろし、横に薙ぐ長剣が鎧の腹を打った。

「くっ！」

セイヤは思わず顔を歪めた。

「『光の精霊よ！』」

「『万物の根元マナー——的を貫け！』」

続いて振り下ろされる鉄の腕に、二本の光の奔流が突き刺さる。ヤテンの精霊魔法とタイキの古代

語魔術である。ごとりと、と鈍い音がして、戦斧が床の上に落ちた。

それでもまだ、相手は自在に操れる腕を四本も残している。雨霰と降り注ぐ刃の雨に、セイヤは防戦一方となった。たまらず跳び退る彼の頬を小剣の鋭い振りが掠め、血を滲ませる。

どくんっ

その瞬間、心臓を鷲掴みにされるような衝撃がセイヤを襲った。

「ぐっ」

体中の血が沸騰するよう感覚が駆けめぐり、やがてそれは外へ外へと膨張しはじめる。得体の知れない何かが、内蔵を突き破り、皮膚を裂いて外へ飛び出そうとするようなその感覚は、激しい苦痛に、自分が自分でなくなるような崩壊感を伴い。

「くっ、うああああアアアッ！」

たまらずあげた叫び声すら、すでに自分のものではないような気がした。

「セイヤ セイヤ！」

次第に遠くなる仲間の呼ぶ声を聞きながら、セイヤは意識を手放した。

「セイヤ！」

\*

今日はこれで、幾つのドアを開けただろうか。

ヴィーナスは商売道具の鏡と鍵開け棒をポケットにしまうと、静かに扉を開いた。  
「何? ……水の音?」

漏れ聞こえる音に耳を澄まし、ヴィーナスは明かりを掲げた。  
魔法の明かりに浮かび上がったのは、一頭の馬の姿だった。

「馬?」

「いえ。あの角——ユニコーンよ」

マーキュリーが静かに言った。

「? でも、羽がないぞ?」

「それはペガサス」

すかさずマーズがジュピターにツッコミを入れる。

「どっちでもいーっしょ。似たようなもんじゃない」

「いえ、かなり違うと思うんだけど」

今度はマーキュリーがヴィーナスにツッコんだ。

片方の前足をあげ、今にも駆け出しそうな躍動感に溢れた一角獣の像は、正方形の部屋の中央に設けられた、流れる水を湛えた円形の泉の中に立っていた。

「何か書いてあるわね」

ヴィーナスが像に近づいた。

「読めるの?」

怪訝そうな顔をするマーズに、ヴィーナスはもちろん、とウインクで応えると、台座に刻まれた銘文を読み上げた。

『姿は違えど、その本質は変わらず』

我に触れんとする者、しかと心得よ』

「……だつてさ」

訳が分からない、という風に肩をすくめる。

マーズは呪文とともに小さく印を切った。魔力感知の術だ。

「とりあえず、何かの魔法がかかっているのは確かだね」

「我、っていうのは、もちろんこのユニコーンのことよね。ユニコーンの本質って……」

マーキュリーはぶつぶつと呟いて考え込んだ。

「何かしら。ユニコーンは命を司る精霊と関わりがある、って、言われてるけど」

「『男嫌い』?」

ヴィーナスが割り込む。

そう。ユニコーンは人間の、乙女にしか心を許さないとされている。

「あは。マーズみたいじゃん」

ジュピターが笑った。

「そうね。気難しくて男嫌い」

マーキュリーもくすくすと笑う。余計なお世話だわ、とマーズは少しむっとした顔で呟いた。

「しっかし、よくできてるなあ。ほんとに走り出しそうじゃん」

ひとしきり笑うと、ジュピターはそう言って、

「ジュピター！ むやみに触っちゃ駄目っ！」

マーキュリーが止めるより先に、本物の馬にそうするように後ろ足の付け根をぺちぺちと掌で叩いた。

「う」

ふいにジュピターが動きを止めた。

「ジュピター！」

「うーん……」

不安げに見つめるマーキュリーの目の前で、ジュピターはこきこきと肩を鳴らした。

「……なんだか、身体が軽くなった気がする。すっきりさっぱり、疲れが取れた感じだよ」

「どれどれ？ ……あら、ほんとだ」

ヴィーナスもジュピターを真似てユニコーンの像に手を触れる。

「……本当に」

マーキュリーも馬の首をそつと撫でてみた。

「どうやら、癒しの力があるみたいね。この像」

「……そうみたいね」

マーズも仏頂面のまま馬の腹に手を触れる。



「……こんな結果オーライの展開でいいのかしら。」

彼女の密かな悩みを、仲間は知るよしもない。

「さあつ。癒されちゃったところで次、はりきっていつてみよー」

そう言っつて部屋の中を見回すヴィーナスの、視線が壁のある一点でふと止まる。

「どうしたの？」

「隠し扉があるの。しかも、一度こじ開けた跡がある」

「あちゃあ。先を越されたか」

さして悔しそうでもなく、ジュピターが額をべち、と叩いた。

「大丈夫よ」

そう言っつたのは、マーキュリーだった。

「たとえ九九の扉を開いても、最後の一つを開けられなければ宝は手に入らないわ。そういうものでしょうか？ 宝探しって」

\*

壁の一部が横に滑ると、下へと続く階段が姿を現した。薄闇の底からは白い光と、時折剣を打ち合うような金属音が漏れている。四人は急いで階段を駆け下りた。

そこで四人の目に最初に飛び込んだのは、巨大なモンスターの姿だった。長身のジュピターよ

りもさらに頭三つ分は高いであろう身の丈。全身を覆う緑色の鱗はぬらぬらと光り、背中には大小の翼や尻尾がでたらめに生えている。歯は鋸のように鋭く、それらを剥き出しにした口は異常に赤い。まさしく化け物と言うにふさわしい容貌である。

そして、見知ったエルフの盗賊と、床に倒れ臥した魔術師。

「大丈夫か！」

ジュピターは叫んで、バスタード・ソードを抜くと彼らの元に駆け寄った。

「手を出すな！」

彼女たちの姿を見るなり、ヤテンが叫ぶ。

「っ、何言ってるんだ！ こんなときに意地はってんじゃないわねえ！」

「あれは——あれはセイヤなんだ！」

怒鳴るジュピターに、ヤテンはさらに悲痛な声で叫んだ。

「セイヤっ！ つ、畜生！ タイキ、しっかりしろ！ こんな時に寝てんなよな！」

セイヤ、と呼ばれた緑色のモンスターは、体中に無数の傷を負いながら、部屋の中央に鎮座したゴレムを相手に闇雲に暴れていた。

「あの化け物が？ どういうことだよ！」

「こっちが聞きたいよ！」

「この非常時に逆ギレしてんじゃないわよ！」

自分もかなりキレ気味で、マーズが怒鳴る。

「おそらく、剣に毒か何かが塗られていたのでしょうか」

言ったのは、マーキュリーの治癒魔法を受けて目を覚ましたタイキだった。

「あのゴーレムの小剣がセイヤに触れた途端に、それは起こりました。刃に毒が仕込んであったのでしょう」

「ええ、間違いないわ」

マーキュリーが頷いた。

「『リビング・ドール』、さっきマーズが受けたのと同じ毒よ。女性ならその名の通り、人形のような姿になるけれど、男性だとあんな風に、モンスターに姿を変えてしまう」

「だったら、早く！ 解毒の魔法、使えるんだろう？ タイキ！」

「解毒の術を施すには、相手に触れないといけないんです」

縄のように訴えるヤテンに、タイキは眉を顰めて答えた。

「だったら、近づいて触れられるようにすればいいのね」

マーズはそれだけ聞くと、くるりと踵を返した。

「ヴィーナス！ なんとかあの化け物をこっちにおびき寄せられない」

彼女はマーズの呼びかけに親指を立てて応えると、懐から何かを取り出し、緑色の怪物に向かって投げつけた。

床に転がったのは、銅貨——コインである。

怪物が振り返ったところを再び、顔をめがけてコインをぶつけるヴィーナス。

「はいはい。鬼さんこ・ち・ら。カモンカモン♪」

挑発は彼女の十八番（の一つ）である。

怪物はヴィーナスに向かって近づいてきた。身の丈二メートルはゆうにある化け物である。歩幅も当然大きく、あっというまにヴィーナスの眼前まで迫ってきた。

同時に、マーズの呪文も完成した。

「『万物の根元マナ、その力、彼の者を封ずる戒めとなれ』！」

力あることばが解放されると同時に、怪物はその動きをぴたりと止めた。指先の一本に至るまで、動かすことがかなわなくなる。

「今よ！」

「『偉大なる智神ラーダー——』」

タイキは怪物の緑の鱗にそつと手を触れた。

「『全き肉体を蝕まんとする、邪悪な力を消し去り賜え』」

変化は一瞬だった。怪物の身体は一瞬波打ったかと思うと、みるみるうちに小さくなり、セイヤの姿に戻った途端にぱたり、と床に臥した。

「セイヤ！」

ヤテンが真つ先に側に駆け寄った。うめき声を上げて、ゆっくりと身を起こすセイヤ。

「セイヤ。大丈夫ですか」

タイキも心配そうにその顔を覗き込む。

「うぐ……あんまり大丈夫じゃねえ」

ヴィーナスやマーズはいえ、そっぽを向いたまま振り向こうともしない。ジュピターもあさつての方を向いてわざとらしく口笛など吹き、マーキュリーに至っては背けた顔が真っ赤に染まっている。

「セイヤ………とりあえず、これを着てください」

タイキは法衣の一番上のローブを脱ぐと、セイヤに渡した。

彼の着ていた服も鎧も、身体が変化した時にことごとく破れて辺り一面に散らかってしまっていたのである。

\*

モンスター化したセイヤが大分暴れたおかげで、台座を守るゴーレムはほとんどなく冒険者達によって叩き壊された。

「さ。いよいよお宝とご対面ね」

そしてヴィーナスが今、慎重に、そつと台座に手を触れた。

と、台座の前に、一人の女の姿が現れる。宙にぼんやりと浮かぶその姿は、どうやら魔法によって生み出された幻影のようだ。

『来訪者よ、よくぞここまで辿り着きました』

幻影は、柔らかな下位古代語で語りかけてきた。

『我が名は、ハルナ・サグラダ。偉大なるポーシヨン・マスターの家系、サグラダ家の当主。そして、私の遺産を、私と同じ苦悩を分かち合うことのできる者に託すため、この迷宮を築いた者。』

見事ここまで辿り着いた来訪者よ。あなたがたにはその資格があると信じ、この封印を開きましよう』

「……モーシヨン・バスターって何？」

「『ポーシヨン』マスター。薬学を専門とする人よ」

こそこそと尋ねるヴィーナスに、マーキュリーが答える。

『私にはかつて、結婚を約束した人がいました。親の決めた縁談ではありませんでしたが、私は彼を心から愛していましたし、彼も私を愛してくれていると信じていました。ところが、その彼が、他に女を囲っていたのです。しかも、こともあろうに蛮族の女を』

「あー……好きじゃないのよね、こういう、惚れた腫れたのどろどろした話って」

眉間を指で押さえて、マーズが呻いた。

『私は嘆きました。そして彼に問いたりました。いったい、彼女のどこがそんなに——私よりも——魅力的なのか。彼女にあって私にないもの。それは「肉感的なポーシヨン」だったのです。平たく言えば、私には胸がなかった』

「うあ……何か、すごい馬鹿馬鹿しくなってきた……」

ヤテンは盛大な溜息をついた。

『だから私は作ったのです。豊胸の秘薬を。この薬によって、私も肉感的なプロポーションを手に入れることができました。胸も、そんじょそこの蛮族の娘には負けなくらい大きくなりました。彼も私の許に帰ってきてくれました。ですが——ですが、それでも虚しさを感じずにはいられません。私の価値は、この胸の大きさだけなのですか？女の値打ちは、胸だけで決まるのですか？もしもこの薬を世に出せば、きっと、皆がこぞって求めるようになるでしょう。男も、女も。そして「巨乳にあらずんば人にあらず」な世の中が訪れることでしょう。そんな世の中にはしたくない。だから私はこの薬の製法をずっと秘密にしてみました』

『無論、この薬の製法を永遠にこの世から葬り去ることも考えました。ですが、後世、この薬を、汚らしい肉欲の為ではなく、正しき心をもって役立ててくれる者が現れるかもしれない、とも思いました。そのため私は、このような意匠を凝らした迷宮を創り、薬の製法を封印することにしたのです』

「……『男嫌いの迷宮』ですか」

タイキはげんなりした顔で溜息をついた。

「道理で。苦労させられるはずです」

「……やっぱ、人間の考えることってわかんない」

両手を頭の後ろで組んで、面倒臭そうな顔をするヤテン。

『私の課した試練を乗り越えたあなたは、きっと私のこの胸の内を理解し共感してくれることができるものと信じています。だからこそ、この豊胸薬の製法をあなた方に託すのです。あなたがたの決

断が、この世界の男性にとっても女性にとっても、幸福なものとなることを切に願っています——」  
そう言って、幻影は姿を消した。

がこっ

やがて、台座の蓋が自ら開き、中に収められていた羊皮紙の束と、葉の入った小瓶が姿を現した。

「どうぞ」

タイキはそう言って、一步退いた。

「この場所に先に辿り着いたのは私たちですが、私たちだけでは最後の封印を開けることは叶わなかった。その宝を手にする権利は、あなた方にあります」

「そう。じゃ、遠慮なく戴くわ」

マーズはそう言って、羊皮紙の束を手にとると、小さく呪文を唱え始めた。

『——あかあかと照らせ』

それは一瞬のことだった。マーズの手から炎がぱつと燃え上がったかと思うと、

「えっ」

「あっ」

「はっ」

「ああっ！」

皆が口々に声を上げる間に、紙の束は灰になって床に散った。

「なっ、ななな何てことをするんですか！」



あまりのシヨックに口をぱくぱくさせながら、タイキが思わず声を荒げた。

「古代魔法王国の貴重な遺産を！」

「そうだ！ さんざんな目に遭って苦労して、やっとここまで来たんだぞ！」

セイヤも声を上げた。彼が言うとは非常に説得力のある台詞である。

「るさいわね。女心のわかんない奴は黙ってなさいよ」

口げんかならマーズは負けない。

「彼女の期待は残念ながらハズレね。魔法王国が滅びて新しい時代が来ても、人の欲望は変わらない。こんなものが世に出たらロクなことにならないのは目に見えてるわ。だから私が代わりに始末してや

ったのよ。Understand?」

強い口調のマーズにびしっ！ と指さされて、男達はぐうの音も出ない。

「……確かに、未知の魔法薬が灰になってしまったのは残念だけど。それも仕方ないわね」

マーキュリーも納得したように頷いた。

「まあ、マーキュリーがそう言うなら」

「まあ、マーズがそう言うなら」

あとの二人も口々に言って頷く。

「……あほらし。帰ろう、セイヤ、タイキ」

ヤテンは退屈そうに欠伸を噛み殺し、うん、と伸びをした。

「……そだな」「帰りましょうか」

「私たちも帰りましょう」「そうね」

「そだね。腹減ったし」「お風呂も入りたいし」

こうして、四人と三人はぞろぞろと、肩を並べて歩き出した。

「……服も着たいし」

「全裸にガウンって、なんか露出狂の変態みたいだよ、セイヤ」

「うるへー！俺だって好きでやってんじゃねー！」

それから暫く、脳天気な笑い声が地下の迷宮に響き渡った。

——だんぢょん攻略中級コース・終

---

セーラームーンRPG⑦ だんぢょん攻略中級コース

著 深森薫

表紙 飛鳥圭

2003年 8月 初版発行

2023年 4月 PDF化にあたり加筆修正

発行者 Bitter & Sweet (深森薫)

<http://mimorikaworu.yomibitoshirazu.com/>